

2 事業の内容

1 区長挨拶



皆様こんにちは。宮前区長の野本でございます。

本日は、ようこそ地域包括ケアシステム構築に向けた宮前区民シンポジウムにお越しくださいました。

川崎市は、今年3月に「川崎市地域包括ケアシステム推進ビジョン」を策定いたしました。一般的に、「地域包括」とは高齢者だけに関係するものと思われがちですが、川崎市のビジョンでは「誰もが住み慣れた地域や自ら望む場で

安心して暮らし続けることができる地域を実現するために、保健・福祉・医療の分野に限らず、まちづくりや教育・経済などあらゆる分野が関わっている」という認識です。

ビジョンづくりの先頭に立たれた慶應義塾大学名誉教授の田中滋先生は、こうおっしゃっています。

「地域包括ケアシステム概念は、何らかの支援を得つつ生活を継続していこうとするすべての住民にあてはまります。多世代交流によって、障がい者、高齢者世代、そして子育て世代と児童も共に生きる街づくりが目標なのです。」

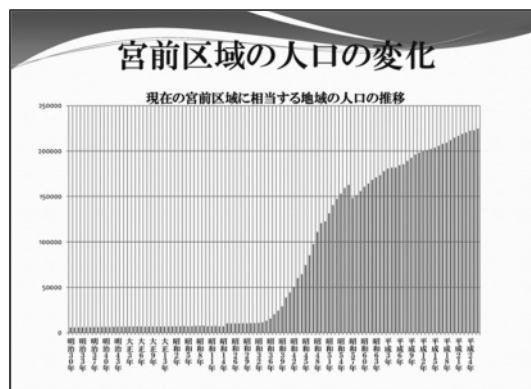
これからスライドを使ってお話をさせていただきます。

今からちょうど50年前、昭和40年頃の開業少し前の宮前平駅です。宮前区は、この50年で最も変貌を遂げたまちのひとつでしょう。この写真を見て、懐かしいと思われる方、引っ越してきた頃に残っていた風景を思い出した方、ここはどこだろうと驚かれる方、それぞれ違う思いを持つ方たちが暮らしています。



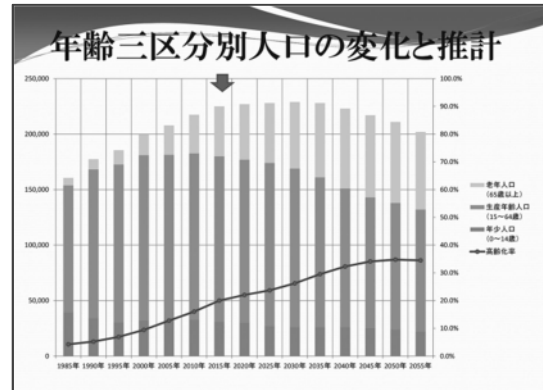
明治30年から約120年間の、今の宮前区にあたる区域の人口推移を、グラフにしたものです。昭和13年に川崎市に編入されるまでは、向^{むか}お^かみ^{みや}さ^き丘村と宮前村で、その後は多少の区域の変動がありますが、まるでクジラの背中に昇るような急カーブで、人口が増えています。

戦前には1万人に満たなかった人口は、田園都市線が長津田駅まで延伸した昭和42年には5万人に、その5年後の昭和47年には約10万人と倍になりました。昭和57年には約15万人となり、新しく「宮前区」となりました。平成12年には約20万人、現在は約22万5千人になっています。縦4.5km、横9km程のこの区域に多くの人に移り住み、新しい田園都市を形成してきたのです。



そして今、日本の人口はゆるやかなカーブで減少し始めています。これは、30年前からの区の人口統計と今後の人口推計をグラフにしたものです。区の人口は、今から15年後の平成42（2030）年まで少しずつ増えた後に減少すると予測されています。これまでの急激な変化に比べると、ずっとゆるやかなものです。

一方、人口構成も変化します。グラフでは、65歳以上の方の割合が増えていくことを示しています。15～64歳の生産年齢人口は、実際には15～22歳には学生が多く、65歳以上で働いている方も多いので、あくまでも年齢による区分となります。

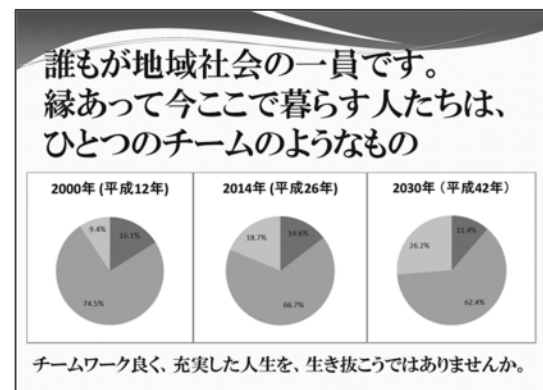


左は15年前、平成12（2000）年の人口構成のグラフです。中央は最新のもので平成26年10月、右は15年後、平成42（2030）年のものです。約15年後には、4人に1人が65歳とされています。

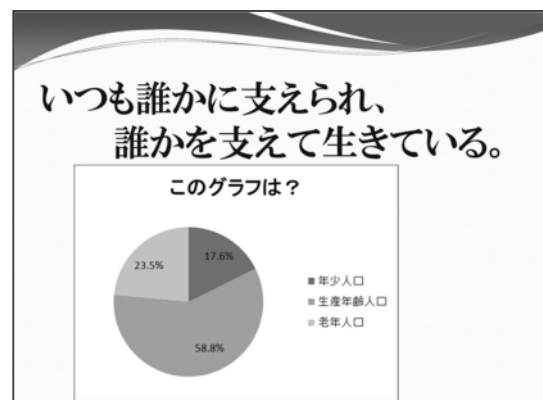
縁あってこの地に暮らす人たちは、好むと好まざるとにかかわらず、同じ空間、同じ時間を密に共有しています。

街路に花を植えて「おはよう」と声を掛けるような社会、顔を見かけなければ「最近どうしたのかしら」と思いやる親しい関係も、この地域から生まれているのです。

我々は、広い意味でのひとつのチームのようなものです。このチーム構成で、平成42（2030）年に向かって今後の高齢社会にどのように充実した人生を生き抜いていくか、皆で考えていきたいと思っています。



これは、現在85歳の方が暮らしてこられた時間の長さをグラフにしたものです。現在の日本の平均寿命は、WHOの発表では男女合わせて満84歳ですので、このグラフは平均的な日本人の人生を表しています。17.6%の時間を年少者として、58.8%を生産年齢者として、23.5%を高齢者として過ごしたということを示しています。



グラフを自分の人生とした考えたときにどうでしょうか。年少者、生産年齢者、高齢者の境目は、実に曖昧なものです。年金制度や健康保険制度などの社会的なしくみ、制度において年齢は重要な基準である一方、人間という存在は、ある年齢が来たら支える側から支えられる側に100%チェンジするという単純なものではありません。一生涯、誰かに支えられながら誰かを支えて生きているのです。

最後に、新聞の投書を2つご紹介します。1つは、75歳男性からのものです。

「登録している福祉協会の紹介で、昨年4月から小学1年生になるダウン症女児の登校付き添いボランティアを始めた。正直言って、70歳を過ぎた爺さんが朝起きて通学なんてきついなあ、と思いながら引き受けた。その子のママが1歳になる子どもに手がかかるための援助だ。そして今年の4月、女児の転校に伴い私の役目は終わった。最後の日の朝に迎えに行くと、この子がおじいちゃんに選んだという青いハンカチをいただいた。嬉しくて寂しくて、思わず目頭が熱くなった。私の宝物にしよう。1年間元気をもらいました。本当にありがとう。」

もう1つは、84歳女性からのものです。

「毎朝7時過ぎになると、我が家の横の道を小さな女の子がお父さんと手をつないで、お話をしながら通ります。年の初めには、お父さんに抱っこされていたと思います。時々拝見するだけなのに、女の子がいつの間にか大きくなって、歩いている姿を見てはその愛らしさにひとり微笑んでしまいます。背広姿のお父さんは出勤前のお役目なのですね、ご苦労様です。そのうち、ひとりでランドセルを背負って通る姿も見られるかもしれませんね。私はあまり寝坊をしないようにして、こうして成長していく元気な女の子が見られるとよいと思います。」

人と人は、どちらがどちらを、というのではなく、支え合って生きているのですね。

これから、医療・社会保障・福祉などの財政状況が厳しい時代が来ると言われています。そのような時代にこそ、それぞれが持てる力を合わせて、温かな気持ちでお互いを思いやれる地域社会を築いていけたらと思います。

すでに宮前区では、高齢者・障害者・子ども・医療・福祉・防災・まちづくり・歴史・文化・民俗芸能などさまざまな分野で、地域の方が主体となって活発な活動を行っています。本日ご登壇いただく5つの団体の方も、長い間この地域に根を張った活動をされて、支え合うまちを実践的に作ってこられた方です。そして、地域には、まだまだ大勢の方がさまざまな取組をしており、一度にご紹介できないのが残念でもあります。

宮前区では、このシンポジウムを出発点と考え、これからも地域での多彩な取組の紹介や活動の支援に取り組んで参りたいと思います。引き続き皆様のご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

本日のシンポジウムが実り多いものとなりますよう、また、ご参加の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

